

地域における青少年の芸術文化活動に関する研究

梨本 加菜（児童学科・教授）

1. 本研究の概観

本研究は2019・2020年度の2年にわたり、青少年の芸術文化活動の現状把握と、諸活動を社会教育施設等の公的施設や事業によって支える方策の検討を試みた。

前提となる問題認識と、2019年度の報告は別に記した¹ため割愛するが、地域や家庭の経済的・文化的格差を背景に、何らかの障害や生きづらさを抱える青少年を当然のように包摂する、学校外の芸術文化活動の条件整備を論じることが、本研究のテーマである。くしくも2020年は新型コロナウイルス感染症に見舞われ、多くの公設、民間の施設は事業の延期や休館を余儀なくされた。高い社会的評価が伴わない青少年の芸術文化活動は「自粛」が当然視されたきらいがある。芸術文化活動の必要性への社会的コンセンサスと情報格差の問題も加わり、活動の場と機会の保障は、いっそう切実な問題となっている。

最終年度は感染症対策の影響を受けたが、デジタル技術による遠隔での会合や情報交換が進んだのは不幸中の幸いであった。同時に、そうした技術を巧みに生かした若者の表現活動や、あえて直接的な体験活動や人の関わりを重視して事業を展開する現場に瞠目させられた一年であった。本研究の、特に最終年度の概要は次のとおりである。

(1) 文献研究・集会参加による基礎研究

青少年の表現活動に関し、2020年1、2月に、次の集会に参加した。

(a) 特定非営利活動法人 ST スポット横浜「障害福祉と文化芸術の関わりを考える勉強会 第4回 障害のある人の話をきく」……精神障害者の当事者団体（YPS）のメンバーが、パフォーマンス等の自己表現と、福祉施設で当事者が「ピアスタッフ」として利用者に関わり「リカバリー」を実現させる意義を紹介した。当事者が主体となる表現活動や、職員＝健常者／利用者＝障害者の構図、地域の文化施設の役割等で情報・意見交換が行われた。

(b) 「障害者と社会教育」公開研究会「「障害者と社会教育」をめぐる実践動向」於・神戸大学……日本社会教育学会若手会員により、神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」等と京都市青少年活動センターの余暇活動支援事業、国立市公民館のコーヒーハウスに関する報告があった。変容的学習が目指される一方の「分からないけど居る」ことの価値、利用者とスタッフの葛藤の構図、実践の可視化・言語化や理論構築の課題等が検討された。

(c) ST スポット横浜「報告会：障害福祉と文化芸術の役割を考える [調査編] 地域で文化芸術に親しむために」……ST スポット横浜の全区民文化センターのバリアフリー対応調査の報告と、2020年開館の障害者スポーツ文化センター、近隣施設、学校等と積極的に連携する港南区民文化センターの実践紹介があった。障害のある利用者の個別のニーズへの対応や他の観客とのトラブル、介助者を含む障害者割引等の課題も示された。

(2) 青少年の芸術文化活動に関する調査研究と成果報告

2019年度末より感染症対策の影響を受けつつ、次の活動に取り組んだ。

(a) **生きづらさを抱えた若者の美術・美術館体験を促す教育普及事業**……横浜美術館（神奈川県横浜市）と株式会社 K2 インターナショナルグループ（以下「K2」と記す）が協働して実施する「若者支援プログラム」の検証を目的とした調査を行った。詳細は 2. で示す。成果の一部は日本社会教育学会第67回研究大会（2020年9月、オンライン開催）にて、鎌倉女子大学・梨本加菜と横浜美術館・端山聡子が共同で報告した。

(b) **障害のある人の作品展**……2020年2月に国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）の企画展覧会「about me 3」（於・DiA ROOM）を見学した。5つの福祉作業所を拠点に制作された作品を、作者の生い立ちや制作過程の細かな説明とともに鑑賞する。商品化や受賞歴を求めない、作者にとっての表現活動の意味を鑑賞者に問う展示であった。

(c) **横浜の青少年施設・事業における実態調査**……2019年度に公益財団法人よこはまユースの運営する青少年交流・活動支援スペース（さくらリビング）と横浜市立横浜総合高等学校校内居場所カフェ（ようこそカフェ）で実態調査を行った。よこはまユース機関誌（2020年3月）と、IPA 日本支部「子どもの遊び・遊ぶ権利に関するオンライン特別研究集会」（2020年12月、オンライン開催）にて、成果を報告した。

(d) **聴覚障害や難聴のある人の美術鑑賞を促す事業**……2020年1月に「美術と手話プロジェクト」の作品鑑賞のワーク（於・水戸芸術館現代美術ギャラリー）を、9、10月は「育成×手話×芸術プロジェクト」の「ろう者のための美術鑑賞ワークショップ」（於・横浜美術館）を見学した。いずれも感じたこと、考えたことを言語化し、前者は付箋紙に書き出し、後者はオンラインで対話して、活発な意見交換が作品の見方を深めていた。

2. 生きづらさを抱えた若者の美術・美術館体験を促す教育普及事業

(1) 生きづらさを抱えた若者の美術・美術館体験を促すために：問題の所在

公的施設としての美術館は、すべての人に開かれている。国の「平成30年度社会教育統計」によると美術館は博物館法上の登録館453館の他、類似施設は616館あり、関連施設も含めると若者と美術館との接点は全国に無数にあり、美術館が学校で出張授業を行うこともある。しかし美術館は「来ない・関心のない」者には遠い存在で、学校を離れると早速、児童生徒対象の観覧料減免は対象外となる。就学や就労をしていない若者にとり、お金や時間のかかる美術館訪問のハードルは高くなる。家族や就労支援の関係者等に支えられた生活で、不要不急と見なされがちな美術活動を躊躇する若者もいるだろう。

内閣府『令和2年度 子供・若者白書』によると、15-39歳人口の2.3%を占める74万人が若年無業者で、ひきこもり状態にある者は2015年度の推計で54.1万人とされる。語弊を恐れずに言えば、これらの若者は医療・福祉のケアの対象の「障害」や「貧困」等の区分を持たず、当事者や関係者が美術体験や美術館利用のニーズを積極的に示すこともなく、美術館にとって可視化が困難な、潜在的利用者であり続けたと言える。

近年は、何らかの障害やひきこもり経験のあるアーティストの作品の展示や市場が注目され、教育・文化行政の取り組みも大きく進んだ。例えば文化庁は、文化芸術基本法及び障害者基本法に則った「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」に基づき、2019年より「文化芸術による共生社会」と「障害者による文化芸術活動」を推進する事業への

補助を始めている。同年に文部科学省も「障害のある人の文化芸術活動」支援を政策の一つとする「障害者活躍推進プラン」を打ち出している。

これらの施策は障害児者の美術体験や作品の制作、発表の機会が拡充され、大いに評価される。しかし一方で、「障害」のない青少年をいかに対象に含めるか、また制作・発表に比べ成果の可視化が困難な鑑賞の機会の充実が、課題として残ると言えるだろう。

(2) 「若者支援プログラム」と調査の概要

(a) 「若者支援プログラム」について

以上のとおり、生きづらさを抱えた若者の美術活動や美術館利用を促す教育・文化行政や施設の取り組みは、対象となる層の厚さや社会問題としての大きさにも関わらず、ようやく端緒が開かれたばかりであり、その実践は希少であるものの、あらゆる青少年の美術館活動を促すための示唆に富んでいる。そこで2020年は、横浜美術館と、若者の自立就労支援事業を行う K2 が2014年より協働して実施してきた、「若者支援プログラム」の参加者を対象とする事業の効果を検証する追跡調査を実施することとした。

横浜市に拠点を置く K2 は、横浜市と近隣市の行政や関係団体の委託を受け、思春期・青年期の問題の相談事業や就労支援、職業訓練等に取り組み、30年以上の実績をもつ。系列の NPO 法人コロンブスアカデミーが運営する横浜市の委託事業「青少年の地域活動拠点」での美術展の開催、NPO 法人ヒューマンフェローシップによるミュージカルの上演、若者・地域ライブスペースの開設も行われ、創造性にあふれる表現活動を重視した活動に特徴がある。

K2 とほぼ同時期に設立された横浜美術館は、当時も人口300万人を優に超える政令市の12,000点以上のコレクションをもつ大規模館でありながら「(横浜美術館条例第1条) 市民の美術に関する学習、創作活動等に寄与する」「市民とともにある美術館」を目的に掲げ、造形プログラム(アトリエ)等の教育普及事業を充実させてきた。そして2012年に、鑑賞や美術体験の充実を目的とした「教育プロジェクト」が立ち上げられ、この部門の主要事業の一つとなったのが、「若者支援プログラム」である。

同プログラムは、K2 を利用する主に20、30歳代の若者を対象に、鑑賞(みること)と制作(つくること)で構成される美術体験をとおして「様々な見方や考え方を知り、自分と他者について理解を深める」趣旨である。豊かなコレクションをもつ美術館で培われた、自ら見たことの言語化と対話を重視した鑑賞(観察)と、作品の線や質感等の特徴や作家の意図の理解を深める、練り上げられた制作の手法があってこそ、本格的な体験活動である。K2 の施設に美術館が出向く回と、若者が美術館に赴いて実際の展示を鑑賞し、ワークショップを行う回がある。直接的な就労スキルの修得が目的ではないが、体験をとおして他の参加者や美術館のスタッフ(ボランティアを含む)と関わり、視野を広げることも、副次的な目的である。

全国でも希少な、民間事業者の K2 と公的施設である横浜美術館の、それぞれの専門性・実績が生かされた協働事業であり、[表1] のとおり2014年から2019年までに18回実施され、参加は任意であるが延べ154名が参加した。今回の調査対象ではないが、2020年はさらに、オンラインの事前ガイダンスを含めて3回が実施されており、可能な限り施設利用者の状況に合わせた、先駆的なプログラム開発が続けられている。

表1 「若者支援プログラム」(2014-2019年)と調査参加者(P)の一覧

No.	日程	プログラム名称	会場	参加者(P)
1	2014年10月	ヨコハマトリエンナーレ2014の鑑賞 & 消しゴムハンコ制作		1
2	2015年2月	コレクション展鑑賞 & 言葉のデッサン		2
3	2015年5月	石田尚志展の鑑賞 & マスキングテープで『私の線』を考える		2
4	2015年5月	蔡國強展の鑑賞 & 言葉で《壁撞き》を描く・つくる		
5	2016年2月	コレクション展鑑賞 & グルーガンでものをつなぐ・広がる・積む		
6	2016年5月	複製技術と美術家たち展鑑賞 & 言葉のコラージュ・絵のコラージュ		
7	2016年12月	写真表現を考えてみよう	K2	
8	2017年2月	篠山紀信展とコレクション展の鑑賞		
9	2017年9月	ヨコハマトリエンナーレ2017について & 『優美な死骸』を体験する	K2	
10	2017年10月	ヨコハマトリエンナーレ2017の鑑賞 & 折り紙で紋切り		
11	2018年2月	石内都展の鑑賞 & 和紙で時間を表現する		
12	2018年9月	モネ展の鑑賞 & 日常の隠れた姿を写真でさがす		
13	2018年11月	モノタイプを体験してみる	K2	
14	2018年11月	銅版画デモンストレーション & 駒井哲郎展の鑑賞		
15	2019年2月	イサムノグチと長谷川三郎展の鑑賞 & 紙の彫刻		3,5,6,8
16	2019年6月	Meet the Collection 展の鑑賞 & ディスクリプションをしてみる		5
17	2019年11月	抽象表現で名刺制作―田中敦子の作品から―	K2	7
18	2019年12月	コレクション展鑑賞 & 美術館をナナメから見てみる		4,7

(b) 「若者支援プログラム」調査の概要

本調査は「若者支援プログラム」の教育的効果の検証と、調査の成果を生かした事業の発展的な改善を目的に、K2の岩本真実氏、横浜美術館の端山聡子氏と古藤陽氏、そして本学の梨本の4名の共同で開始し、2020年3月に本学学術研究所の倫理審査で承認を得た(鎌倫-19025)。特に梨本の学術研究所助成研究「地域における青少年の芸術文化活動に関する研究」の一環として、青少年の美術・美術館体験をどのように支えるか、アーティストや専門家を目指す訳ではない若者にとってプログラムの意義は何か、そしてプログラムの意義をどのように示すか(事業評価)を課題とした。

調査は、可能な限り当事者の目線でプログラムの効果や影響を見るために、(a) アンケートと、(b) その追加調査としてのインタビューの二段構えとした。コロナウィルス対策のため計画の練り直しを余儀なくされたが、ほぼ変更無く実施することとした。(b)は、ビデオ会議システムによる実施も検討したが、調査の特質から、参加者に馴染みのある施設で、可能な限りリラックスした状態での対面による実施を原則とした。

2020年5月にビデオ会議システムを活用し、K2のスタッフとのアンケート調査の報告会とインタビュー調査の説明会を行い、有益な情報と助言を得ることができた。調査全般にわたり多大なご協力をいただいた皆さまに、この場を借りてお礼を申し上げたい。

(3) アンケート調査：30名の回答から見えてきたこと

(a) アンケート調査の概要

アンケート調査は2020年4月・5月に実施した。過去のプログラム参加者154名のうち、K2からの連絡を受け取ることが可能な者を対象とした調査票のオンライン入力、または

K2の施設での紙面の記入により、30名の回答を得た。

プログラムの教育的効果を見るために、アンケートでは①鑑賞や制作の内容・手法、②参加者間や美術館スタッフの関わり、③どのような力や考え方が身についたか、④自らの生活や芸術文化活動に影響があったかを問うための質問を設定した。選択式の項目の他、それぞれのプログラムに参加した感想を書く自由記述の、次の(ア)(イ)の二部の構成とした。答えやすさを考慮し、無回答であっても提出可能とした。

(ア) 美術鑑賞・制作活動への意欲を、4項目で回答(5段階)

- ①美術鑑賞・制作のプログラムがあれば参加したい
- ②美術創作などの表現活動をやってみようと思う
- ③美術館などの文化施設に行ってみようと思う
- ④美術に関する専門的な教育を受けたいと思う

(イ) プログラムに参加した感想を、4項目で回答(自由記述)

- ①プログラムについて、特に印象に残っていること [印象]
- ②プログラムの中で見た作品について覚えていること [鑑賞]
- ③プログラムで作った作品や制作方法で覚えていること [制作]
- ④参加後の自らの考え方や行動、日常生活を送る上での変化

(b) アンケート調査結果の概要

30名の回答内容の傾向は、次のとおりまとめられる。

第一に、美術館訪問やプログラムへの参加意欲は、全体的に高い傾向が見られた。

しかし第二に、一般的な美術館の来館者調査と異なり、リピート回数の多さが参加意欲に比例しない特徴があった。背景には、1回だけの参加者の多くが、参加・体験活動への意欲が高めであっても、就労等が決まってプログラムに継続して参加できない、就労支援事業ならではの事情があると考えられる。1回だけの参加者に比べ、リピーターの方が(ア)③、④が低めであり、特に美術館等の訪問と専門的な教育への意識的なバリアは高めであると言える。この特徴は、プログラムの組み立てに反映すべき点であろう。

第三に、現在も持続している記憶について、美術史的な知識より、作品の色や形、質感等の造形的な要素や特徴、具体的な鑑賞・制作方法、自らが考えて話した内容や行動が、多く挙げられた。例えば次の回答例が挙げられる。

- [印象]: 「抽象画は意味を持たせてはいけないという田中敦子さんの言葉は芸術というか哲学的なものを感じた。プログラムが始まる前に美術館の周りで写生されている方をよく見かけた。(美術館は)建物からして趣向が凝らしてあった」
- [鑑賞]: 「わり半紙のような大きな紙に、まるで町の地図のように直線や丸が描かれている(中略)空間には何も無いが、四角があるだけで空間が二つになる」、「ライフジャケット?で門みたいのを作ってあってよくみたら古かったり、色が落ちていた所があったりして、使ったものやたぶんすてるやつを使って門ができていた。」
- [制作]: 「最初は何かを描こうとしないで、自由に描いていき、徐々に何か見え始めたらそれを描いていくという描き方で描くというのが新鮮」、「自分はどうか折って

立たせることがつまらないようで、紙をねじる、筒状にするなどをして、いかに折らずに立つかを考えていた。」

以上のように過去のプログラムでの体験が、多くの参加者に鮮明な印象を残していた。

第四に、他の参加者の視点や言動、美術館のスタッフとの関わり、意見交換、共同での鑑賞、制作体験が記憶に残ったとする、次のような自己記述（(イ) ①—④）が見られた。

「他の参加者が身近にある距離が近いものを良く撮れていた事に対して自分が風景の写真ばかり選んでしまった事」、「点と線の描写でも人それぞれでまったく違う印象を与えるものだということがわかった」、「一緒に作品を作ったりしていくうちに、リラックスした状態で話したりすることもできました。」

以上の回答者は、他者との関わりにより美術体験が深められた様子である。プログラムは、参加者間のコミュニケーションを豊かにすることも副次的な目的であり、プログラム終了後に参加者同士で展示室に戻ったり、一緒に横浜の夜景を見ながら帰ったりした者もあり、一定の成果をかいま見ることができた。

第五に、プログラム参加後の行動や考え方の変化について、次のように美術館訪問やもの見方や気づきの変化、コミュニケーションの変化を挙げた者が多かった。

「美術館に足を伸ばして見たいと思った」、「地元美術館にいて作品をみてきた」、「感じたとおりに何か行動してみるということを考えるようになった」、「いろんな見方があるのに気づいた、これは普段にもいかせると思った」、「今後知識を友人に教えることもできるので、貴重な体験だった。」

特に自らの創作活動への影響について、次のような記述があった。

「建物や対象の全景や風景の写真など距離が遠い物を撮っていました。（中略）プログラム以降は、小さい対象も意識を向けて撮るようになりました」、「趣味で絵を描く頻度が増えました」

（4）インタビュー調査：8名の語りから見えてきたこと

（a）インタビュー調査の概要

プログラムの効果を参加者の語りにより詳細に把握するため、アンケートの追加調査として、2020年6-7月に8名へのインタビューを実施した。アンケートでインタビューに参加可能と回答した者を対象とし、創作活動を行うなど美術や美術館に関心がある、アンケート回答の記載が長め、就労のため参加回は少ない等の特徴をもつ者が多かった。なお[表1]の右欄が、インタビューがプログラムに参加した回である。

インタビューがリラックスできるよう、通い慣れた横浜市や鎌倉市、藤沢市のK2の運営する4施設を会場とし、K2のスタッフが必要に応じて同席した。インタビュアーは2名以上とし、そのうち美術館スタッフが一名以上入ることとし、プログラムの開始時より中心的に関わった横浜美術館の関淳一氏に協力していただいた。5日に分けて実施し、参加者への負担を考慮して30分程度としたが、1時間近く話はずんだ場合もあった。

質問項目は、原則的にアンケートの自由記述と同じ項目（上記の（3）（a）（イ））とし、調査依頼時に質問項目と留意事項を書面で示した。インタビューの当日は、インタビューが参加したプログラムを記録した写真や、企画展のチラシ、作品・制作物の見本等の資料を準備し、体験した活動のディテールを思い出しやすくする工夫をした。

(b) インタビュー調査結果の概要

参加者の語りは逐語での文字起こしを行った。特に2019年に参加し、創作活動を行う等の美術への関心を示した3名の語り（P 6、7、8）の概要は〔表2〕のとおりである。参加者の行動や発言に関しては、全体をとおして次の特徴が挙げられる。なお文中の「」は参加者の語りからの抜粋である。

表2 「若者支援プログラム」インタビュー調査 語りのポイント（P 6、7、8）

項目	P 6	P 7	P 8
参加回	[表1] No. 15 1回参加	[表1] No. 17,18 2回参加	[表1] No. 15 1回参加
アンケート	鑑賞、制作ともに高い参加意欲示すが、記述量は少ない。 資料で見た作家、作品を挙げる。美術の専門知識が豊富。	プログラム参加や表現活動は高い意欲示すが、美術館訪問と専門教育は低め。記述内容が豊富。 趣味で絵を描くと回答。	プログラム参加意欲は低いが、美術館訪問と専門教育は高め。 参加者やスタッフとの交流を多く記述した。
美術との関わり	特定の作家、作品を語る中で、美大で理論やアニメーションを学んだこと、「離れたいこともあったけど、美術が好きなのは変わらない」と述べる。 東京都現代美術館など、主に現代アートの展示、美術館に行く。	鉛筆でイラストを描いている。 特定の作家について「けっこう色々調べて、こういうのが見たいなって見つけた」。 高校の宿題で横浜美術館に来た。	趣味でイラストを描き、まれにマンガを描くこともある。 美術館は小学校の行事で行った。プログラム参加は「いいきっかけをいただいた」が、「美術的なことに興味あるというより、仲がいい人がいたから」参加した。
「鑑賞」の印象・効果	好きな作家を扱うプログラムで「ちょうど声がかかって」参加し、やはり「印象が強い」と思った。 初めて見た作品で「屏風にこういう配置は見たことないです。余白の感じとか面白い」と思った。 プログラム後、美術館訪問が増えた。横浜美術館（オランジュリー展）に行った。	田中敦子の作品で「ただの丸と線じゃないと言うか、田中さんがたくさん描いた中での一つが、すごい時間をかけてできあがったというすごさ」を感じた。オルデンバーグの作品は「中が凹んでいて空洞にはなってないんですけど、球体の中心が、くぼんでいる黒」で、「柔らかかそうに見えました」。	制作のワークでは、鑑賞の体験が「最後にものを置いたり、立たせたりする時に関係あったんじゃないか」、「ここは配置的に離れた方がいいだとか、大きいものはどこに置こう」と、話し合いの中で6人のメンバーが「感じたことがあるんじゃないか」と思った。
効果「制作」の印象・効果	紙に石を置くワークは「壁のタイルみたいな、街角みたいなイメージで描いた」、「奥行き表現をしたかった」 A4用紙を折って立たせる「シンプルすぎる」ワークで「悩んで、どうしようかと」思った。	ペンを渡されて「最初、自分もどうすればいいんだろうと思った」が、集中できて「描いているうちにだんだん自由にできるようになった、楽しかった」。 ワーク後に田中敦子の作品を鑑賞して塗りむらはないと感じた。	最初は人の顔を意図して作ったが、次第に「そういうの関係無くて、なんか感覚的に、ここに置いた方がいいかな、とか相談しながら」、「自分の直感」で置くようになった。
他の参加者、スタッフとの関わり	「シンプルすぎる」ワークは「結構みんな思い悩んで、皆さん折ってた」が、「みんな立てたら、すぐ他の方（チーム）を見て回っていた」。「本当は皆さんで話し合ってたね、こういうのやれたら良かったと思いますが」他のメンバーとの話し合いはなかった。	同じ施設から参加した「すごく集中している人」、「時間が足りないって言っている人」に、その時にほぼ初めて「なんでこれに参加したんですかとか、普段絵とか描くんですか」と話しかけた。 館内を回ったチームのメンバーやスタッフが誰かは覚えていない。	プログラム終了後、チームのメンバーに「せっかく来たんで回っていきませんか？って言ったら来てくれて、閉館前まで「ぼそぼそ話し合いながら」みんなで見て、ある作品を「これ一番きれいじゃないですか」等と話し覚えている。
印象・効果 プログラム全体の	「快晴で白いものを触っているのは、けっこう気分が良かった」、「垢抜けた空間で集まって活動できたのは良かった。雨とか曇りだったらまた違う見え方がしたのでは」と話す。	美術館が「展示とかイベントだけでなく、美術品とかも管理してる」「そういう役割があるんだ」、温湿度管理で「ちょっと暗くなっている所があったり、涼しくて寒い所もある」と思う。 ショップやカフェだけでも利用できると「知ってよかった」。	今後、美術館に行ってみたいが「誰かが行きたいなあとと思うし、これみたいに意見交換しながら楽しいんだろうな」と思う。 美術的な内容に限らず、面識のあるメンバーと行ったことが「唯一無二」の思い出となった。
発展的な美術・美術館との関わり	アニメーションも「美術」であり調査対象だと分かると、関心のある海外の作品について話し、その作品やヨコハマトリエンナーレ2020出品作家の関連情報を、すぐにスマホで調べ始めた。 仕事で日程が厳しいが、プログラムに「言ってもらえれば、機会があれば参加したい」と述べる。	プログラム参加後に「他の美術館はどうなんだろうと思って調べたりした」が、実際には行かなかった。仕事がある。 イラストは「最近はいっぱい描いてなくて、すごく離れている」が、プログラム参加時は「描きたいという気持ちが高ぶって」いた。	今回参加して美術館は「ハードルを上げるとなると思ってたんですけど、気軽に足を運んでいい」と思えたが「すごい高尚とか、敷居が高い」のも分かり、「ただどうも、それでいいのかな」と思う。 プログラム後はイラストは「肩の力ぬいて」、「プロが直感的に描いてんだから自分もそれくらいいいかな」と思うようになった。

- 普段から美術に関心がある、創作活動を行う等を行っている者は、色、質感等の要素を細かく観察し、鑑賞、制作の両方の印象が鮮明である。

- 現代アートでは既知の作家や作品が少なく、「知っていること」から解き放たれて作品を観察し、作家の制作過程に思い巡らせた者が多かった。
- 制作は、シンプルなワークで「悩んで、どうしようかと」熟考した者や「描いているうちにだんだん自由にできるようになった」者、「正しさ」を考えず「感覚的に、ここに置いた方がいいかな」と柔軟な考え方に「シフト」した者がいた。
- 制作と鑑賞の組合せにより、「ただの丸と線じゃない（中略）すごい時間をかけてできあがったというすごさ」を感じた者や、「ここは配置的に離れた方が良い」等、鑑賞の成果をすぐに制作に反映させた者がいた。
- 積極的に意見交換したチームと、そうでないチームがある。前者の場合でも制作は集中して取り組んだ。鑑賞は、感想を口にして緊張がほぐれ、様々な意見が出るようになった者が多い。面識のある者と一緒に良かったと話す者もいた。

(5) 「若者支援プログラム」の意義と課題

(3)(4)で様々な回答があるとおおり、プログラムの成果は一つに集約されないが、若者の芸術文化活動を支えるプログラムとしての意義と課題を、次のとおり示したい。

(a) 若者の学習機会の確実な保障

- 積極的なアウトリーチにより、「来ない・関心がない」若者に、確実に美術・美術館体験の機会を保障する優れた実践である。単なる余暇活動、また直接的な就労支援として位置づけず、美術体験を目的化した学習機会となっている。
- 本格的な美術・美術館体験でありながら、通い慣れた施設や、館内の特定の場所でのワークと、スタッフの話し方に安心感があり、心理的なハードルを下げている。
- 施設・設備の特徴、工夫や、観覧料を払わずに入れる美術情報センターやカフェ等の情報を知ること、来館の物理的・心理的なハードルを下げている。

(b) 対話を交えた鑑賞と制作の組合せがもたらす意義

- 鑑賞ではスタッフや参加者との対話や自問により、美学・美術史的な知識に依拠せず感覚を研ぎ澄まして観察し、考えて言語化する。その過程が体験を深めている。
- シンプルな素材・工程の制作は集中できる。知識や技量は問われず、初心者も自信をもって参加できる。美術の知識やスキルを持つ者も、考えながら作業に集中できる。
- 鑑賞と制作の往還により、作品の素材、形、技法等をよりよく観察できる。制作での気づきや模倣、創造性を引き出している。

(c) 共同の学びがもたらす意義

- 既存の知識に依拠せず、参加者間で素朴で直感的な感想を言語化して伝え合い、相互に気づきを促している。アイスブレイクや、互いの作品を見せ合い全体で一つの作品を作るワーク等により、寡黙な中でも意見交換・交流を可能としている。
- 参加者間でプログラム以外の活動や語らいをしたり、相手の言動への関心を高めたりする等、副次的な目的である豊かなコミュニケーションを引き出せることがある。
- 共同の学びにより、作家（アーティスト）の意図や制作の背景に思いを巡らせやすくなる。抽象表現を、一人の人間の営為として理解・共感しやすくなる場合がある。

(d) 現代アートの有効性と、「新しい美術」の可能性

- 上記(b)(c)に見られるとおおり、既修の知識・スキルに囚われずに作品に向き合

うことができる現代アートや抽象表現は、若者支援に向いている可能性がある。

- アニメーションやイラストなど、現代的な「新しい美術」は、若者の芸術文化活動に親和性がある可能性がある。また、前衛的な作品や制作者の生き方は、若者に共感をもって受け止められる可能性がある。

(e) 民間事業者との協働の意義

- 教育普及事業が充実した大型公立館と、アートを重視した若者支援を行う民間事業者の挑戦的で創造性のある企画と密な連携が、本事業を生み出したと言える。
- 「居場所」の機能をもつ横浜市の「地域ユースプラザ」の存在は、就労に特化されない本格的な美術・美術館体験を可能としている。NPOや地域活動支援センター等が積極的にアートに関わる活動を展開している横浜市の独自性も背景にある。

(f) 若者の特性をふまえたプログラムの内容・方法

- プログラムで扱う作品、作家は、若者が再訪問時に親近感をもつこともあり、自館のコレクションの活用は望ましい。
- 就労等で継続が困難な場合があり、1、2回の参加を想定した「一期一会」のプログラムを準備する必要がある。リピーターが美術に関心がない場合にも注意する。
- 寡黙であっても鑑賞や制作の意欲・効果が高い場合があり、「ここに居る」ことや言動に表れない体験も重視し、ニーズを汲み取る必要がある。
- 他館や地域の民間事業者、学校等との情報交換は重要である。

(g) 事業評価の課題：事業改善・発展に向けて

- 生きづらさを抱えた若者に美術・美術館体験を保障する、社会的な要請に応えた事業としての視点が求められる。例えばホイットニー美術館の10代プログラム（**Youth Insights**）の検証は、参加者の美術系や高度専門職の進学、就労を評価する²。またアーティゾン美術館の家族プログラムの追跡調査は、親子の豊かな語りがソースとなっている³。そうした進路や参加回数の増加、豊穡な言葉等の目標値の設定は困難であるが、寡黙な体験活動の過程こそ積極的に評価し、記述していく必要がある。
- 追跡調査は過去の事業の検証のため予算化や人材の確保が困難であり、就労支援への不要なスティグマを避けるため慎重さも求められるが、教育事業の地域貢献の社会的コンセンサスを得るために、事業の検証と情報公開は積極的に行う必要がある。

3. まとめにかえて：青少年の芸術文化活動を支えるための方策

(1) 青少年の芸術文化活動に参加する権利と居場所を保障する

最後に、青少年の芸術文化活動を支え、豊かにするための提言を3点まとめたい。

第一に、多様な活動の土壌となる居場所の整備を挙げる。青少年の活動を①家庭や学校で気軽に営む「名の無い活動」、②社会的評価が伴う「高度な活動」、③情報技術を活用した「現代的な活動」に分けると、居場所事業は①に該当し、成果や優劣にこだわらず、好奇心に任せた幅広い活動ができる意義がある。①の必要は十分に認識されず、地域による差は著しい。かつての青年学級事業の仕組みのない今日、特に学校を離れた者には①は学校や職場を代替する場にもなりうるため、青少年と、必要に応じて同じ特性をもつ当事者を、原則的に無料・無条件で受け入れる、公的な居場所が整えられる必要がある。

国連の子どもの権利条約第31条では、子どもの文化的・芸術的活動に参加する権利と、

行政による環境整備が謳われ、SDG グローバル指標（SDGs）4.aでも「学習環境の提供」が示されている。各自治体の教育振興基本計画や、青少年に関わる基本的な方針に、これらの条項を組み入れる必要があるだろう。

（2）高度な活動、また情報技術を活用した新しい表現活動を促す

上記の②、③についても、子どもの権利条約第31条の一般的意見17号で、文化的生活と芸術に十分に参加する権利と、新たな情報手段等を活用して文化的環境や芸術的形態を創出する権利の条項に裏打ちされる⁴。知識や情報の受け手でなく、社会の発展・変容を進展させる「文化的生活への寄与」の権利主体として子どもを位置づけることが、青少年施策に求められる。複数の中・高等学校の文化部に該当する活動を地域全体で運営する、文化庁が2021年度に事業化する「地域文化倶楽部」の仕組みも注目される。

（3）福祉施設や学校教育等の、他機関との連携の必要

児童厚生施設や就労支援を含めた福祉施設や学校教育、また首長部局の青少年行政との連携は重要である。いずれにしても青少年をサービス提供や教育・育成の対象に留めず、当事者の主体的な参加という視点が求められる。例えば近年、ろう者が企画する鑑賞プログラムが注目される背景には、聴覚障害や難聴のある人についての必要課題の汲み取りが十分でなかった歴史がある。事業の企画段階からの参加と、意見聴取が求められる。

注・参考文献

- 1 梨本加菜（2019）「青少年の文化活動に関する考察」『鎌倉女子大学紀要』第26巻、15-27頁、同（2020）「地域における青少年の芸術文化活動に関する研究（中間報告）」『鎌倉女子大学学術研究所報』第20巻、39-44頁
- 2 Whitney Museum of American Art（2015），“Room to Rise: The Lasting Impact of Intensive Teen Programs in Art Museums”
- 3 アーティゾン美術館（2020）『美術館と家族：ファミリープログラムの記録と考察』
- 4 子どもの権利委員会（日本語訳：平野裕二）（2013）「一般的意見17号」